

『村の手仕事』



ある日の入館者のはなし。
「僕は茅葺屋根を葺く職人です」と言ったのは、二十代後半と思われる若者である。おや、めずらしい！と根掘り葉掘り詰め寄る管理人を前にして、ちよっと気の毒な若者である。

自分が親方と出会って、実際に一緒に仕事をしたのは一月半くらいしかなかった。高齢だった親方が体調を崩して、そのまま回復することなく亡くなってしまったので…。だから自分は仕事をしながら、現場で学んでいる。屋根の解体をしながら、作り上げたときの工程を逆にたどり、隅々に施された工夫を読み解いてゆく。

若者はそう話してくれた。昔からの木造家屋は呼吸をしていること。暑いから、寒いからと、季節を問わず常に適温に調節された建物に住む不自然さ。そのために必要とされるエネルギーのこと。次から次に話題は尽きない。彼は自分の住む小屋を造ろうと思っていると聞いた。木、草、土など自然の素材だけを使って造ってみたい。堅穴式住居のような？それとも木地師が山に建てた小屋のような？と想像してみた。実に楽しそうだ。彼がそんなことを考える理由がわかる気がする。

六年前の大震災で、人間が堅固に創り上げた世界がごとごとく津波にのみ込まれていった映像が思い浮かぶ。そして都会に送る電力のための原子力発電所で起こった事故。懲りることなく進もうとする社会を尻目に、若者たちは生き方を模索していることを教えられた。

「ところで、この辺には茅場がありますか？」と質問されたのだが、彼の住む地域では材料の確保が難しくなっているというのだ。茅の生えていた広い土地は別荘地となり、またある箇所はメガソーラーが設置されたという。技術の継承以前に、材料の確保というのが深刻な問題のようだ。この絶滅危惧種のような若者の選択した道が、これからも続いてゆくことを願わずにいられなかった。

帰り際、連絡先を問うと、自分はインターネットをしないのでメールアドレスではなく電話番号を教えてください。これまた今どきの若者にしてはめずらしいと、理由をたずねると、自分の身体感覚に集中したいからと答えが返ってきた。ああ、私たちは頭でものごとを知ろうとするこのなんと多いことが、と気づかされた。

また、ある日のお客さんのはなし。

館の前を通り過ぎたワゴン車の窓から見たのは、竹で編まれたカゴに違いない。車を停めてやって来たお客さんが見学をおえて帰る時、車に載せているのは竹カゴですか？と聞いてみた。

自分は竹細工の仕入れをして、それをあちこちに卸している。今日は松川に仕入れに行った帰りで、これから諏訪に戻るのだという話だった。竹

細工といっても、工芸品や美術品ではなく、昔から暮らしの中で使われてきたザルやカゴを扱っている。例えば、今日仕入れたのは背負いカゴと畑仕事などで腰に下げるカゴだ。いくらぐらいするものですか？と聞いてみた。腰カゴを店に卸す時には、ひとつ二千円くらいだという。しっかりとした作りの割に、やけに安い。

自分の親の代に、こういうものを安く買い叩いてしまったのがいけなかったというのだ。それがために、今こういう物を作る人がいなくなっている。松川でこれを作っているのは、おじいさんが一人だけだという。プラスチック製品にどんどん庄された時代、中国から安く大量に仕入れられた時代を経て、やっぱり長い年月の使用でも壊れにくいしっかりした物をという求めに応じようとしても、今や作る人が消えつつあるのが現実のようだ。

仕入れ値で譲ってもらった腰カゴは、丁寧に作られていて長い年月もちそうである。一人だけというおじいさんがいなくなったら、竹カゴ作りの技も知恵も消えてしまうのだ。こんないい物を作る人がいなくなるのは、本当に残念だ。

農業の傍ら、昔の人は生活に必要なものを自分達で作ってきた。ワラ細工しかり、機織りしかり。村の中には鍛冶屋もいれば、畳屋も桶屋もいた。油屋もあれば造り酒屋もあった。村の中で事足りる、といっても過言ではなかった。多くを求めなければ、村の中は十分自給自足できるひとつの独立した世界だったのだと思う。そこには外の世界の経済とは、あきらかに違う価値観が存在していたはずだ。

村の中に雇用がないから若い人たちは戻らない、とはよく聞く話だが、雇われるだけが仕事ではない。人が暮らしているかぎり、衣食住に関わる需要はある。屋根葺き職人の若者は特殊技能だけに、全国に呼ばれて出かけると言っていた。そこまで専門的でなくても、副業として手仕事は続いできたはずだ。村のおじいちゃんの作ってくれたワラ草履も日除け蓑もムシロも、とても優れた物だと思っている。今では入手困難な物だけに、欲しいという人はいるのではないだろうか。コツコツと作られた物の価値は、必ず認められるはずだ。

先日、大西公園で「大鹿クラフトまつり」が開かれた。村内外から手仕事をする人たちが集まった。村の中にも手仕事をする若者たちは思ったよりいるようだ。作品や産物を持ち寄って市が開かれるのも、今回が四回目になり毎年の楽しみとなった。ここに、昔から村の暮らしの中で使われてきたもの、作られてきたものが並んだら面白いだろう。それを作る若者の出現に期待したい。